

第2回岐阜県幼児教育推進会議 会議録

日時:令和7年9月29日(月)13:30~15:30

場所:岐阜県総合教育センター2棟1階 第2研修室

1 挨拶 岐阜県教育委員会 義務教育課 課長

2 議 事

○ 岐阜県幼児教育アクションプラン「ぎふっこ」すこやかプランの策定に向けて ~「幼児教育実態調査」等の結果から~

〈幼稚園・保育所等と小学校との連携について〉

会長: 各所属、立場から意見を聞きたい。

委員: 幼稚園の先生方は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、以前より内容について理解を深め、自園の子供たちの姿をとらえている。

委員: 保育園・認定こども園では、就学支援を行う際に、生活支援に注目がいく背景がある。一方、小学校の役割は、学習が中心となる。園では、生活や家庭の支援が入ってくるので、学習支援と生活支援の区別がつけにくい。幼保小接続連携の接点についての新たな課題がある。

委員: 幼保小連携会議等を、どの時間で行っているのか。先生方の時間が確保できているのか。つなぐための時間の確保ができるとよい。先生方が、互いに気を遣って話せないのは、もったいないので、うまくできるとよい。

委員: 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、園の理解が深まっていると、私も感じている。また、10の姿のうち、「言葉による伝え合い」「自立心」については、園でも課題を感じている。5歳でも、文章で話す力が弱い子がいる。その子が、小学校に入学した時、すぐに国語の授業で発表して、自分の考えが言えるかという点と難しい。あとは、すぐに諦めてしまったり、最後までやり切ろうとする力についても、課題になっているところなので、園としても力を入れて取り組んでいる。そのため、小学校との交流活動において、研究を進めている。

委員: 研修会や授業参観等、幼保小連携が進んでいる。昼間の時間帯で、小学校のスタートカリキュラム作成に幼保の先生と一緒に相談する会議をもつことが理想だが、実施には、課題がある。本市の会議の中で、1年生担任と幼保の先生と一緒に考えた授業をした。その際に、各学校からの意見交換の場があった。そのような会議を行えるとよい。

委員: 近くの小学校の先生が園で保育を一緒に行った。小学校教員から、「園がねらいをもって保育をしていることが分かった。」「1年生になった時に、遊びの工夫をすることが大切だ。」という感想をいただいた。

〈事務局より〉

課長： 小学校の教員は、1年生が大変だという。根拠は、授業がスタートだと思ってしまう、机に座ってないと、小学校の学習が始まらないと感じているからである。接続期カリキュラムを見て、子供たちが遊びの中で学習しているから、それを引き出すようにという意識があることで、小学校での子供たちへのアプローチが変わってくる。園と小学校の意識が近づいた後、そこから広がっていくための、園と小学校との話し合いの場をつくるのが次の課題。具体的な指導改善のヒントを見つけられたらよい。

主管： 1年生の担任の意識が変わってきた。これまでは、一人一人の子供の情報交換をすることが多かったが、幼稚園がどんなねらいをもって、どんなことをしているかを理解するために交流をするようになった。互いのねらいを理解することが重要である。

〈研修及び教員・保育士の資質向上について〉

委員： 近年、幼稚園でも「預かり保育」を行っているため、全職員での研修は難しい。園では、独自で研修を行っている。常勤の担任は、研修ができているが、自主的に研修を受けることがあまりないことが、課題である。

委員： 岐阜県は、保育研修が充実している。ZOOMでの研修のため、参加人数が多い。全国で活躍する方の話も聞ける、参集での研修も多い。ずっと続いてほしい。

現在、性虐待、ヤングケアラー、外国人等の課題があるため、自分たちのソーシャルスキルを高める必要がある。困っている子供たちがたくさんいる。そのために、研修が必要であることを切実に感じている。

委員： 園では、研修会の組織があり、園で必要とする研修を計画している。これまでは、座学中心だったが、大学の先生と相談し、体幹を鍛える、読み聞かせといった、即実践できる具体的な研修を計画した。その結果、若手の研修を受ける人が増えた。

委員： ICTの整備が進み、園でZOOM研修が受けられるようになり、積極的に研修に参加できるようになった。一方、市の指定園による研究発表については、実施の仕方を変えていくことを考えている。

委員： 「小学校教育との接続」に関わる意識が高まってきたからこそ、研修の内容としても注目されている。

委員： 研修の内容として、遊びの指導のニーズが多い。リハビリは、訓練でなく遊び。子供は、訓練では伸びない。遊んで楽しいという経験が大切。遊びについて、機能を高め、心も体も成長する。

発達障がいの子に対しては、わかりやすい環境の工夫が必要となる。スケジュール等見通しをもつことで安心して過ごせるが、そういった研修にニーズがあると感じている。

〈事務局より〉

課長： 研修は、キャリアアップにつながる。研修をした時に、自分にとってどんなプラスになるのかを実感してもらえるように、研修を実施する側が考えることが大切である。それから、切実な問題として、命とか人権の危険にさらされている子をどうするかという、何よりも優先してやらなければならない内容について、そういうことに気付き、どことどう連携をするかという研修が必要である。

若い先生に対しては、先生方の実態ベースで動画とか、参加型、短時間での研修を視点にして、研修をどう続けていくのかを考えていく段階になってきている。

主管： 園で自主的に研修を行うことが難しい状況という実態を踏まえて、次期アクションプランを考えていく必要がある。

〈多様な幼児の支援及び子育て支援等について〉

委員： 子供たちが、小学校に入学後、関係施設との関係が途絶えるケースがある。そのため、福祉部局が学校に子供たちの情報を知らせることを始めている。小学校では、関係機関を含めたケース会を行って分かるというケースがある。小学校で気付くきっかけが増えるという点で、小学校も福祉部局とつながることが大事である。

特別支援学級や学校等について、早い段階から、保護者に伝えていく必要がある。園から声をかけられずに過ごした子が、就学時検診において突然伝えられ、保護者が驚くケースがある。小さい頃はまだよく分からないからとこれまで伝えられなかったことも、気になったら保護者に早めに伝えていくことが必要と感じている。

最近、家庭での YouTube が止められないという、保護者の悩みを多く聞く。各家庭では、それぞれの番組の YouTube を見せている。昔は、子供たちは、各家庭で同じテレビ番組を見ていた。この番組が終わったらお風呂に入るというように、生活の時間をきちんと区切って過ごせていた。しかし、今は、区切りがつきにくいので、子供がずっと YouTube を見ているから、家庭で苦労している保護者がいる。豊明市でスマホに関わる条例の話題があったが、保護者が制限できない現状があることを踏まえて支援していく必要を感じている。

委員： 様々な機関で発達障がいに関する支援が行われている。先程、就学時健診検診で突然という話題となったが、市としても5歳児検診を行い、早めに支援ができるように取り組んでいる。

委員： 支援ということ言えば、子供を外で遊ばせることができる、場所が少ない。木遊館のような施設がもっとたくさんあればうれしい。遊び方が分からない子供も多くいるのではないか。

委員： 専門性を有する者の配置について、小学校でも、市の教育委員会、医療機関等との連携を行おうとしている。現場が求めていることが、調査結果として表れている。

発達障がいの子に対しての研修に、ニーズがあると感じている。

〈事務局より〉

関係課：家庭教育について連携の充実を図っていく。現在16市町19チームある、家庭教育支援チームを推進している。不登校、発達障がい等のチームがあり、機能的にニーズに応じて動ける。活用していただきたい。また、「話そう語ろう我が家の約束運動」の取り組みを利用して、家庭と園との話ができるきっかけをつくっていただきたい。

関係課：特別支援コーディネーターを介して、個別の支援計画を丁寧に作成していただいている。また、2月ぐらいに小学校の先生が園の様子を、5月ぐらいに園の先生が小学校の様子を見ながら、子供の支援について引き継いでいる。さらに、研修では、園に専門性のある方が訪問し、実践的な研修を行っている。

保護者の特別支援に対する理解も必要であるため、年少、年中児の保護者にも今後進めていくことが必要である。

関係課：法定研修、初任者研修や、12年目研修については、園長の認識とのずれがないか確認し、来年度の研修を構築していきたい。また、今年度、「教員育成指標」については「働き方」「特別支援」の2点をポイントに改訂する。育成指標をご活用いただきたい。

子どもたちの変化、教員の変化を感じている。若い先生は、遊びを通して学ぶ幼保の大切さを学生時代に学習している。教員養成を担う大学等と連携することも必要である。

〈会長まとめ〉

会長：5点私の考えを述べる。1点目、スタートカリキュラムの作成、幼保小での助言・協力については、トップダウンである程度進めてほしい。幼児期の遊びを通した学びも大切にしたいスタートカリキュラムで、ゆっくり小学生にしてほしい。2点目、幼保小の相互理解は進めるが、それぞれの違いはある。違いは大切にして、結びつけず、関連を大切にする。互いの立場を尊重し、理解する。接続期カリキュラムの作成1点に絞って、連携、協力を進めてほしい。3点目、研修は、自主性と強制性のバランスが大切である。様々な問題に対応する内容については、強制的なものも必要となる。育成指標と照らし合わせて研修を構築していく。4点目、多様な支援の中で、家族を育てることが大事になっている。家庭の教育力の低下が言われている。子供は育てても、家庭が育たないと社会が台無しになると指摘する社会学者もいる。支援を必要とする家庭への支援を行うことが必要である。5点目、1つ1つの繋がりをつくるためにも、幼児教育センターの設置が必要である。

3 諸連絡

- (1) 第3回岐阜県幼児教育推進会議について
- (2) 債権者登録について